

01-015

両親、子ども療養支援士、看護師らと協働しPatient-and Family-centered Careに取り組んだ特発性ネフローゼ症候群の女児例鳥海 俊^{1,2}、遠藤 周¹、管藤 七海¹、春名 英典¹、
清水 俊明¹¹順天堂大学 小児科²順天堂浦安病院 小児科**【はじめに】**

近年、医療者をもつべき心構えとして「Patient-and Family-centered Care」の概念が提唱されている。患者や家族は医療の対象者ではなく中心者であり、医療者はその支援者であるべきとする概念である。米国小児科学会からもPatient-and Family-centered Care and the Pediatrician's Role (Pediatrics 2012; 129(2):394-404) による声明が発表されており、小児科領域においてもChild Life Specialist等の多職種と共に患者・家族中心の療養支援を行う必要性が示されている。またこの声明では、医療者同士だけでなく患者自身やその家族とも協働する重要性が示されている。

【症例】

6歳の初発ネフローゼ症候群の女児。家族歴として数年前に妹を重症先天性心疾患にて亡くしていた。入院後の問題点として、極度の不安から来ると思われた母親の医療者への頻回の訴え、患児自身の血液検査・点滴等の医療処置に対する拒否等が認められた。また退院前になると「私、死ぬの?」「帰れないの?」などの発言が認められた。これらの問題点への取り組みとしてPatient-and Family-centered Careの一環として療養支援・介入を行い、病態理解・疾病受容支援を試みた。その際に、子ども療養支援士のアドバイスを得ながら、患児の理解力や発達段階に応じるよう内容を工夫した。またこれらの準備をする際に父母の意見を積極的に取り入れ、家族を含めた療養支援を行った。小児科医・研修医・看護師・看護学生・病棟保育士・子ども療養支援士など多様な立場を巻き込んだの協働作業となった。これらの経験を報告するとともに、その中で小児科医がとるべき立場・役割について考察する。